

芭蕉元祿事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十八年十月度 入選句 (投稿総数二千五百五十一句・一般投句数七百五十句)

特選 選者 名和 永山

水が好きな風はなほすき赤とんぼ 愛知県名古屋市 館野 茂子

「好き」「すき」のリフレインがリズムをよくしている。一度声に出して読んでみてください。「水が好きな風はなほすき○○○○」まず、良い俳句は内容もさることながら、このリズムの良さ、歯切れの良さが重要になります。だつたら「赤とんぼ」でなくても「蝶々」でもいいの？と言いたくなりますね。季語の「赤とんぼ」だからこの句をさらに佳くしているのです。「色」が多様に見えるでしょう。秋の水は澄んでいます。風も澄んでいて、「秋の風」の季語にも「色無き風」というのがあります。とんぼが飛んでいる空は青空です。背景の色が見えてきますね。リズムが良くて、季語が生かされている句です。

行く末を雲にまかせて秋の暮 大垣市 安福 けい子

「秋の暮」誰もが何となく寂しさを感じる季節である。自然の草木が枯れ始め、気温も下がり人々の動きや心も元気がなくなる頃である。この季語は人生においても、十分に活躍した時期も過ぎたことを表わしていると言える。けい子さんは、今まで精一杯生きてきた自分の生き方に満足した末、「この先は雲の行方にまかせてみよう」と思つたのであろう。「行く末を雲にまかせて」と言えるのは、それまでの人生がどれほど充実していたのかを物語っているのである。けして投げやりの人生を詠んでいるのではない。俳句は表現されている内容の「裏」にある部分を、深く鑑賞する文字であると思う。

表札をローマ字にして錦蔦 大垣市 鈴木 美江子

日常の何の変哲もない様子を内容にした句であるが、「季語との調和」がよい。まず、見た目のローマ字が「蔦」のあの流れるような、あるいは何かに巻き付くような、その様子が季語とマッチしている。また「錦蔦」という季語に「錦」で変化させたこと、つまり「表札をローマ字にした」変化と単なる蔦ではない「錦蔦」が生かされている。「錦蔦」とは、単なる「キツタ」をいうのではなく、その中でもキツタの葉の白い斑(ふ)入りのものを意味する。このような一点で「季語が生かされた」句である。俳句では「季語がものを謂う」のである。

秀逸

ひとり来て思ひ出探す花野かな	静岡県静岡市	内藤	知
古民家の手斧のあとやちちろ鳴く	福井県福井市	三ツ山	ひろし
長皿に収まりきらぬ秋刀魚かな	大垣市	吉田	てるみ
仁王の目のつぶることなき秋夕焼	大垣市	平野	きぬよ
駄駄こねて玩具ねだる児鴉高音	養老郡養老町	田中	紫香
露草の藍は純情空の碧	不破郡垂井町	西垣	和志
綻びをゆるりと正す雁の棹	岐阜市	堀江	美州
曼珠沙華手折り供華する無縁塚	不破郡垂井町	久保田	紘義
たわい無き耳打ちばなし秋の風	揖斐郡大野町	藤田	涼子
山包む霧雨けぶる関ヶ原	大垣市	片山	洋紅

入選

コスモスや挨拶誘ふ通学路	大垣市	奥田 和子
定年のなき農の道虫の声	大垣市	大角 信華
古戦場いろなき風に暮るるなり	大垣市	岩田 唯志
ちちとははおとうとのちをたまおくり	大垣市	窪田 しずの
静寂も詠経も消さる蟬しぐれ	大垣市	松岡 みつ
勝てるまでトランプ続く夜長かな	大垣市	傍島 隆
底知れぬ深さに魅入る今日月	大垣市	多和田 一徳
夕暮の人の恋ひしき吾亦紅	不破郡垂井町	竹嶋 富美子
笙の音がとけゆくほどの月今宵	不破郡垂井町	川瀬 慶泉
コスモスの中より子らの童歌	大垣市	神野 武彦

入選

澄む水を一口もらひ句碑めぐる	大垣市	末守 節子
大樗ひと葉ふた葉と秋の闇	大垣市	北浦 典子
健啖は長寿の秘訣天高し	大垣市	村田 通夫
ここだけの話はずむや青みかん	大垣市	吉田 てるみ
秋の蚊や長き詠経を彷徨へり	岐阜市	小湊 順子
秋の月雲の小袖で顔隠し	福岡県田川郡	成松 義紀
秋の滝一切の音一つにす	大垣市	高田 雅章
窓開ける秋がひっそり隅に立つ	加茂郡八百津町	新井 悠
秋空や槌音高く足場組み	神奈川県横浜市	龍野 ひろし
いわし雲スーツケースの軽さかな	大垣市	鈴木 美江子

選者吟

音立てて音くはへ落つ朴落葉

永山